# 大隅正八幡宮境内及び社家跡

【所　在　地】霧島市隼人町内
【種　　別】国指定史跡
【指定年月日】平成２５年１０月１７日

---

大隅正八幡宮境内（鹿児島神宮）

『延喜式』に見える薩摩，大隅，日向の中で唯一の大社である鹿児嶋神社と，それを中心に成立・発展した「宮内」という宗教都市の中心をなす，弥勒院跡と桑幡・留守・沢・最勝寺の四社家の館跡からなる遺跡。鹿児嶋神社は，平安時代に八幡神が勧請されたことによって，大隅正八幡宮となり，平安時代末期には，大隅国の一宮として保護された。鎌倉時代に源頼朝の庇護や，元軍調伏の祈祷を行うことなどを通じて，多くの所領の寄進を受け，それを基に，発展した町の様子を良好な状態で留めていることは，他に例を見ない。

正八幡宮境内や弥勒院跡，社家の館跡で行われた発掘調査で，中国やタイ，ベトナムなどの東南アジアの陶磁器類や，京都の土器が出土したこと，石清水八幡宮などに残る文書等から，石清水八幡宮や宇佐八幡宮，鎌倉などの交流がうかがわれるなど，この遺跡が，平安時代以降，異文化交流の場としての役割を果たしていたことが知られる。

社家の館跡の発掘調査では，その規模や構造が判明するなど，いずれも，その保存状態が良好であり，社家の館の構造を知ることができる。また，いずれも11世紀頃からの遺物を出土するなど，一宮を中心とした町の形成や発展を知る上で重要である。

中世における地域間交流や都市の形成事情や過程を知る上でも重要な遺跡である。